まどか☆マギカ____慾望(悪魔)の終焉

ミニマニ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

円環の理に導かれるのを拒んだ明美ほむらは、鹿目まどかの持つ円環の理の一部をもぎとり、世界を自分の都合のいいように改変した。

――――これは、改変された世界でほむらを待つ、最悪の結末の物語である。

目次

第1話「記憶」 ―――― 1

第1話「記憶」

「　　あなたはこの世界が貴いと思う？欲望よりも秩序を大切にしてる？」
「…　それは、えっとその…。わ、わたしは貴いと思うよ？やっぱり自分勝手にルールを破るのって悪い事じゃないかな…」
「　　そう、ならいずれあなたは…　私の敵になるかもね。でも、構わない。それでも私は、あなたが幸せになれる世界を望むから――――」
　　望むから
　　望むから
　　望むから

　　まだだめよ
　　まだだめよ

”まだだめよ”

「何か、とっても大事な事を”忘れてる”気がする…」
放課後、親友である美樹さやかと共に下校する途中、唐突に鹿目まどかは呟いた。
そしてまどかはそのまま、立ち止まった。
「ん？どうしたのまどか。」
それを見かねたさやかが声をかける。
「…」
しかし、まどかはまるで人形の様に一歩も動かず、黙っている。
どうやら、さやかの声は届いていないみたいだ。

自分の世界に行ってしまっている。

「　　まどか？」

「　　はっ！」

さやかがもう一度声をかけると、まどかははっとした様子で戻ってきた。

「さ、さやかちゃん…」

「なーんか今日ずっと様子がおかしいね、何かあった？

もし何か困ってるなら、このさやかちゃんに相談してみなさーい！あたしは頼りになるよー？」

さやかが言うように、この一日、まどかはずっと様子がおかしかった。

何を言われても曖昧に返事をし、授業もまったく聞いてなく、先生に怒られていた。

ずっと、何かを考えているようだった。

「あ、あぁうん。ありがとう。でも大丈夫だよ。少しぼーっとしちゃっただけだから。」

「いやいや、全然そうには見えないって。

もしかしてアレか？さやかちゃんじゃ頼りないってか？頼りないってか？そうなのか？

愛しのまどかにそんな扱いされたら、さやかちゃんショックだよー。」
しくしくと、さやかは大袈裟に泣くポーズをしてみた。
「…　もう、からかわないでよー。
本当に大丈夫だよ。
心配してくれてありがとう、さやかちゃん。」

まどかは、優しく微笑んだ。
だが、大丈夫というのは嘘だ。
まどかは、”ナニカの記憶”を思いだしそうになっていた。
絶対に忘れてはいけなかっただろう、ある記憶を。

でも、あと一歩のところで思い出せない。
しかし、これだけは何となく解る。
自分には、”大切な使命”があると。

その時だった。
隣にいるさやかが、聞こえるか聞こえないかくらいの声で”言った”

「その内”思い出せる”よ、まどか。」
「――えっ？今何か言った？さやかちゃん。」
「いいや、何もー。」

――あたしは、知っている。
この世界が、偽りの世界だって。
この世界は、悪魔によって創られたもの。
明美ほむらという悪魔によって――
あたしは、あの悪魔を許さない。
あたしは覚えている。
あの悪魔は、あたしの記憶を完璧に変えれたと思っているようだけど、なめないで欲しいな。
死んでも忘れてたまるものか。
まどかの想いを否定した、あいつを。

明美ほむら、あんたの創ったこのちんけな世界は、最近綻びを見せているよ。
まどかが神としての使命を思い出そうとしている。
まどかが完璧に思い出した時、あたしはあんたに言ってやるよ。
「ざまぁみろ」ってね。

「　　ちゃん」
「　か…　ちゃん」
「さやかちゃんっ！」
「　　っ!?」
まどかの出した大声で今度はさやかがビクンと反応し、戻ってきた。
「あ、あはは。
どうやらあたしもみたいだね。」
「もう、散々私をからかったのに、さやかちゃんも同じじゃん。」

「ごめんごめん、まどかのが移っちゃったんだよ多分。」
「困ったら私のせいにするの、良くないと思うなっ！」
まどかは怒った表情を見せると「さやかちゃんなんて知らないっ！」と、さやかをその場に置いて歩き出した。
「あ、ごめんっ！待って！待って！」
先に行くまどかに謝罪の言葉をかけながら、さやかはまどかの元へ走った。

――そんな二人を、機嫌が悪そうに眺めている黒髪の少女がいたことは、まどかとさやかには知るよしもなかった。

「・・・ まどかが幸せなら、私は・・・」
明美ほむらは、複雑な表情で、呟いた。